

## キリストの復活と私の人生

## コリント第一 15:12-20

30年ほど前にアメリカでキリスト教についてのリサーチがありました。一番ハードルが低い、つまり信じ受け入れやすいことはイエス・キリストは歴史上の人物として存在したということでした。次にはイエス・キリストは本当に奇跡や癒しを行ったのでしょうか、これもまずまず受け入れやすかったのです。段々とハードルが上がってゆき、イエス・キリストの十字架、そしてハードルが高い、つまりなかなか信じられないこととして「キリストの復活」があり、もっとも難しいのはキリストの再臨ということでした。ところで「クリスチャンにとって一番大切なものは何でしょうか。」こう質問されたら、皆さんでしたら、どう答えるでしょうか。パウロは、コリント人への手紙第一 15:3-4 で「私があなたがたに最もたいせつなことから伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと。」と書いています。十字架上で死ぬということ、これ自体残酷なことですがイエス・キリスト以外にもそのよう最期を遂げた人は大勢います。十字架はもともと当時の処刑方法の一つでしたから。クリスチャンの信仰にとって、なによりも大切なものは、キリストの復活です。もちろん死がなければ復活はないわけですし、イエスの十字架の死は私の罪ゆえに受けるべき罰を代わりに受けてくださっているわけですが、それでもキリストの復活は、それがなければキリスト教はなく、それを信じていなければクリスチャンではないと言って良いほどのものなのです。

## 1. 復活の事実

キリストの復活が、クリスチャンの信仰にとって大切なのは、それが変わることはない事実だからです。クリスチャンがキリストの復活を信じているのは、「キリスト教ではキリストは復活したことになるから、そのように信じておきましょう。」というのではないのです。それを事実、そのとおりのこと、「キリストはよみがえって今も生きておられる」と信じているのです。キリストの復活を本気で信じていない人は、決して「キリストは復活した」とは言いません。「キリストは復活したと『信じられていた』』と言います。しかし聖書を見てゆきますとキリストの復活を否定する人も、キリストの弟子たちがキリストの復活を信じたということは認めています。

イエスが十字架に架けられた時、弟子たちは、いずれ、自分たちもユダヤ人に捕まえられるにちがいないと、恐れ、逃げ、隠れしていました。そのような弟子たちが、ユダヤの指導者の本拠地、エルサレムに集まり、ペンテコステの祭りの真っ最中に、堂々と、キリストはよみがえったと語り出したのです。もし、キリストの復活が事実でないなら、そこにいるユダヤの指導者は、その場ですぐに、反論することができたはずですが。イエスのお体が納められた墓は、同じエルサレムの町中にあるのですから、イエスがその墓から復活されたのでなければ、イエスが眠っている墓の側で「キリストは復活した」と叫ぶのは狂気の沙汰です。イエスの教えを十分に理解できず、イエスから「信仰の薄い者たちよ」とお叱りを受けていた弟子たちが、こんなにも確信をもってキリストの復活を宣べ伝えることができたのは、なぜだったのでしょうか。それは、彼らがキリストの復活の事実を目撃したからです。復活の信仰は、復活の事実から来たとしか言えないのです。

キリストの復活を認めたくない人々は、人々のイエスを慕う思いがつのって、キリストの復活という「神話」が誕生したのだと説明します。しかし、「伝説」や「神話」というものは、何百年もしてから生み出されるもので、やがてまた消えていくものです。ところが、ペテロは、キリストの十字架からわずか五十日しか経っていない時に、キリストの復活を宣べ伝えました。そして、この復活のメッセージは、たちまち全世界に伝えられ、二千年の長い年月がたっても伝説や神話の世界に葬り去られることなく、今も、世界中の人々によって信じられ、それを信じた人々を生かす力となっているのです。弟子たちが「イエスはよみがえられた」と叫んで以来、二十一世紀の今日まで、キリストの復活の力は全世界の何十億と

いう人に現実に現われています。キリストの復活の力をいただいて、信仰に生かされている私たちも、その生き方を通してキリストの復活を証明することができるのです。

パウロは、復活の事実がなければ、クリスチャンの宣べ伝えていることは、それがどんなに立派で、良いことであっても、中味のないものになる、私たちのキリストへの信仰がどんなに真面目で、真剣なものであっても、意味のないものになると言っています。そればかりか、「神がキリストをよみがえらせた」というメッセージは、もし、それが作り話であるなら、神に逆らう証言となり、神を冒とくすることになると言っています。実際、パウロが、サウロと言われていた時にクリスチャンを迫害したのは、復活してもいないイエスが復活した等と言い、イエスをキリストだと言っているクリスチャンの「偽りの罪」を見逃せなかったからです。しかし、パウロは、後に復活したキリストに出会い、罪を犯していたのは、キリストの復活を否定し、クリスチャンを迫害していた自分の方だということに気付いたのです。

キリストの復活は、私たちの人生の希望ですが、もし、キリストの復活が事実でなければ、その希望も、保証のないものになってしまいます。その希望は単なる思い込みということになってしまいます。当時、クリスチャンは、心ある人々からは尊敬を受けましたが、そうでない人々からは「愚か者」「哀れな者」としてさげすまれていました。それでパウロは、17節から19節でこう言っています。「そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあつて眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあつてキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」キリストの復活が事実でなければ、クリスチャンほど哀れな者はないのです。確かにそうでしょう。ありもしないことをあるかのように信じて生きるのは常に空しさが口を開けて我々が落ちるのを待っています。しかし、事実、キリストは復活され、今も生きておられます。キリストの復活を信じるクリスチャンは、この世で、一番しあわせな者であり、キリストの復活によって死にさえも打ち勝つ、人生の勝利者であり、永遠の命を約束された、最も希望に満ちた者なのです。

## 2. 復活の信仰

復活は事実です。しかし、それが、もし、私たちにとって意味のないことであれば、いくら事実であっても、私たちの人生に何のインパクトもあたえません。日本で一番大きな湖は琵琶湖です。これは紛れもない事実です。しかしそのことが自分の人生にどのような意味があるかというなら、まあそこに住んでるなら少し違うと思いますが自分の人生に大きな影響を与える事実ではありません。しかし、キリストの復活は、事実は事実でもそのような事実とは違います。それは、私たちに重大な意味のある事実、私たちの人生を変え、世界を変える事実です。

キリストの復活は、イエスが神の子、キリストであることを証明します。この世界を造り支えておられるだけでなく、私たちひとりびとりを愛し、導かれる神がおられるということを、キリストの復活は宣言しています。キリストを心に救い主として迎える時、今まで自分の力だけに頼ってきた人生が、神と共に歩む人生に変えられていくのです。

また、キリストの復活は、キリストの十字架での死が、私たちの罪のための身代りの死であつて、私たちは、キリストを信じることによって罪の赦しを得ていることを保証するものです。キリストが十字架で亡くなられたままで終わっていたなら、その十字架の死がどんなに感動的なものであつても、私たちは、罪の赦しも、永遠の命も、天国も確信することはできません。しかし、キリストの復活によって、私たちは、キリストが永遠の命の与え主であることを確信することができるのです。キリストは天に帰り、父なる神の右の御座に着き、そこで私たちのためにとりなして下さり、私たちのための罪の赦しを確実なものにしてくださっています。キリストを信じる者は、キリストと共に天に場所を持つことができるのです。これらの事はみな、キリストが復活されたという事実に基づいて確信することができるので

す。

そして、キリストが復活されたということは、死が終わりでないことを、私たちに教えてくれます。キリストの復活を信じる者たちも、やがて、復活にあずかることができるのです。キリストは初穂とられましたとあります。初穂ですから、ぞくぞくと後に続くのです。もし、私たちの人生がこの世のものだけなら、あとが無いわけですから生きているうちに好きなことをして、楽しめるだけ楽しんでおけば良いということになります。パウロの時代も、そうした生活をしている人が多くいたようで、パウロは、この手紙の32節で、その人たちのモットーを引用しています。「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか。」しかし、私たちは、死のかなたにも輝かしい将来があることを知っているのです。正しい生活に励むことができるのです。キリストの復活によって、私たちは生活の方向を定めることができるのです。

キリストの復活の大切さは、二千年前も、今も決して変わるものではありません。私たちがキリストの復活を信じるのは、それが「キリスト教の教えのひとつだから」というのでなく、私たちの人生に基盤を与え、日々の生活に力を与えるものだからです。復活の事実を、遠い世界のこととしてではなく、現代の私たちにとって、いや自分にとって意味があり、力のあるものとして生かすことが、私たちの「復活の信仰」なのです。過去のキリストの十字架と復活の事実と現代の生活、将来の希望、これをつなぎあわせるために、さらに、私たちの信仰を働かせたいと願います。復活の信仰と現実とは何の噛み合わせも無く、空回りの人生とならないようにと祈ります。今は将来の天の御国の門の前にいるようなものなのです。